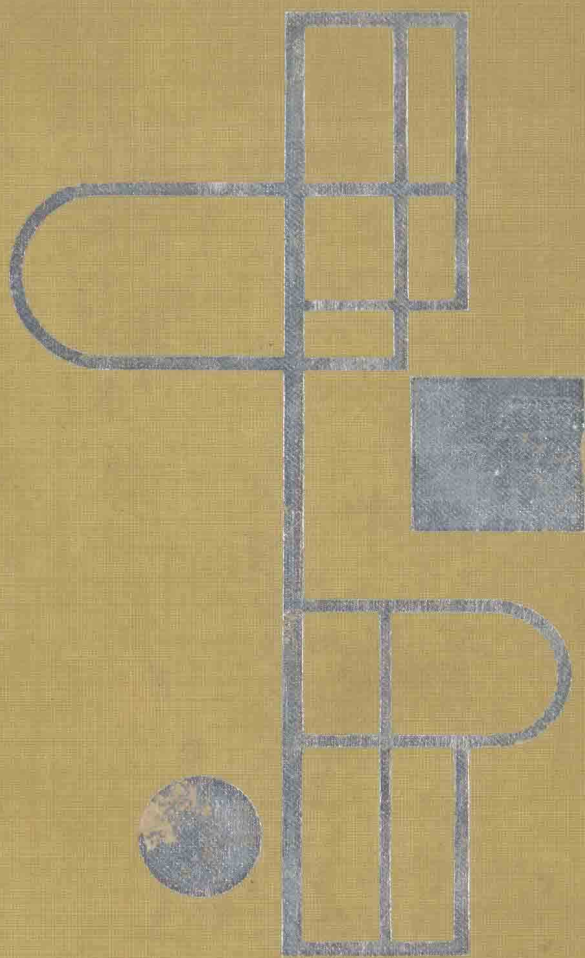
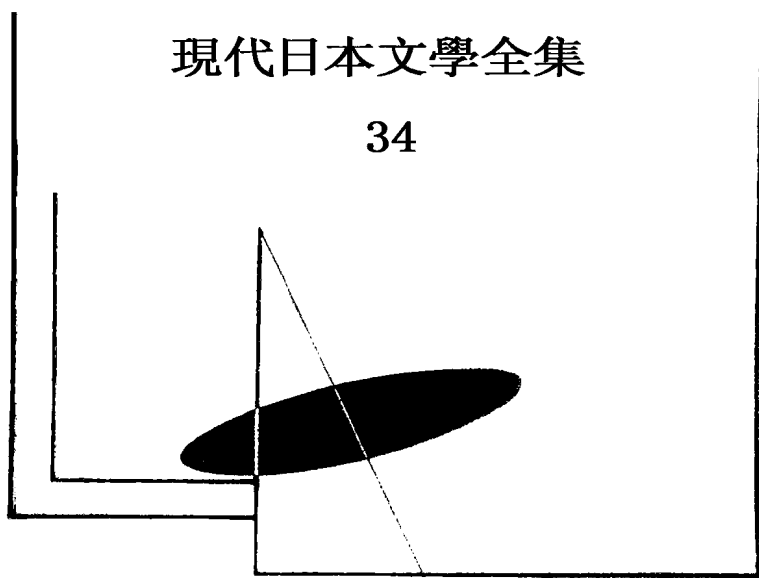




加能作次郎
葛西善藏
牧野信一
嘉村磯多
集

現代日本文學全集

34



筑 摩 書 房 版

加能作次郎
葛西善藏
牧野信一
嘉村磯多集

昭和三十年九月一日 印刷
昭和三十年九月五日 發行

著者

加能作次郎
葛西善藏
牧野信一
嘉村磯多

發行者

古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者

多田基
東京都新宿區改代町二三

發行所

筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

整版株式會社 精興社
印刷多田印刷株式會社
製本矢島製本所

加能作次郎集 目次

厄年……………七

世の中へ……………三

乳の匂ひ……………六

葛西善藏集 目次

哀しき父……………八

悪魔……………九

子をつれて……………四

馬糞石……………一〇

不能者……………二

遊動圓木……………三

蠢く者……………一四

椎の若葉……………一三

湖畔手記……………一七

血を吐く……………一六

醉狂者の獨白……………一五

牧野信一集 目次

爪……………二八二

父を賣る子……………二八五

地球儀……………二九三

村のストア派……………二九五

吊籠と月光と……………二〇七

西部劇通信……………二二六

ゼーロン……………三三〇

バラルダ物語……………三九

酒盗人……………四三

夜見の巻……………三五

鬼涙村……………三五八

裸蟲抄……………二六七

淡雪……………二七五

嘉村礒多集 目次

業苦……………二六七

崖の下……………二九七

父となる日……………三〇八

足相撲……………三二八

曇り日 三二

不幸な夫婦 三九

牡丹雪 三五

秋立つまで 四三

途上 四六

美しき作家（廣津和郎） 三三

葛西善藏論（谷崎精二） 三六

牧野信一（山本健吉） 三八

嘉村磯多（福田恆存） 三七

解説 四〇

年譜 四八

装幀 恩地孝四郎

加能作次郎集

児病玉窓

山茶花よ

雨しとくなり

作次郎

厄 年

一

故郷へ歸らうか、それとも京都へ行かうか、平三は此の問題に二日間悩まされた。同じことを積んだり崩したりして何時までも考がまとまらなかつた。

彼は毎年夏季休暇には歸省するを常として居たが、今年是最初から京都で暮さうと思つて居た。それは故郷の生活の單調無爲なのに懲りて居るのと、他に厭な事情もあるのと、一つは京都は彼の第二の故郷とも言ふべき土地であり、その上もう六七年も行かなかつたので、其間に親戚故舊の間に種々の變化もあつた様だから、久振に其等の人々に遇つて色々話合つたら、楽しい床しいことであらうと思つたからである。勿論長い間だから八月丈け京都に居て其前後は東京で暮さうといふ豫定であつた。併し故郷へは明かにさうと言ひにくい事情もあるので、今年には東京に居て勉強せねばならぬから歸られな

いと手紙を出して置いた。

一度京都へ行くことに決してからは、彼は一二ヶ月の間は來るべき夏の生活を非常に愉快な

ものと種々都合の宜い様に想像して楽しんで居た。彼の心を牽きつけたものは京都の山水でもなく名所舊蹟でもなく、彼の今迄の生活に最も影響のあつた、且つ最も意味が深いと彼自身に思はれる過去の生活の追想であつた。少年の彼を中心とした小さい京都の社會を、今の彼が想出す其の心持が當時の生活に種々の色をつけ形を與へて、益々彼の心をそより立てたのである。姉、伯父母、從兄弟姉妹、此等の人々の佛を思ひ浮べて、此人には斯う、彼の人にはあゝと一人一人に話す材料や話方等まで想像して、何だか戀人にもでも遇ふ様な懐しい胸のわく／＼する思で居た。

今一つ彼をして此夏京都の生活を楽しく思はせた理由がある。友のSが七月下旬東京を出發して信濃飛騨を旅し、美濃路を経て八月上旬京都に出て、二週間ばかり滞在しようといふ豫定であつたので、是を機會にして、伊勢、尾張、近江、播磨などに夫々歸省して居る友達が同時に京都に落合はう、藤村の「春」の人物が、富士山麓の吉原の宿に東からと西からと落合つた様に、各方面から同時に京都に落合つたらどんなに心ゆくことであらうと云ふ様なロマンチックな空想がそれであつた。兎に角さういふことに定めて、幸ひ、平三の親類の家が宿屋であるので、彼から手紙で室のことや宿料のことまでも交渉して置いた。

七月の始めには皆夫々國へ歸つて、残つたものは平三とSばかりとなつた。平三は別段何を

するでもなく、只だ月日の早く經つのをのみ待つて居た。

所がもう五六日で出發しようといふ時になつて、Sから「種々都合悪しく旅行は出來ない、少くとも京都へは行けないから不惡……」と言つて來た。平三はひどく失望した。早速Sを訪うて最初の計畫を實行する様に勧めた。けれどもSは種々家事上の都合があつて到底不可能であつた。

「ぢや僕も京都はよさう。君が行かないのなら。」

平三は斯う言つて別れた。では如何するかといふ考もなかつたが、實際其時は止めようと思つた。恰も彼の京都行の動機は單に友達と一緒に落合ふといふ事のみであつたかの如く、其のために最初の動機も破れて了つた。今迄色々に思ひ浮べて居た楽しい連想や空想は一時に消えて了つた。最初の豫望が大きかつただけ、それだけ失望も大であつた。今迄懐しく床しく思つて居た親戚故舊との會合や、其後の變化などは左程心を動かさぬ様になつた。「あの人とあんな風な話をし、この人とはこんな風に話をするといつた所で、只だそれ限りだ、それが何で面白からう。話すことはこれ限りだ、聞くことを見ることはこれ丈だ、別段してもしなくても宜いことだ、又必ずしも今年に限らない、よし又行つたとしても一週間位は面白からうが逆も一ヶ月餘は居られまい、單調になり淋しくなるは矢張り同じことだ、矢張り一人ぼつちだ、行つた

とてつまらない……。

「止さう。——では何處へ行かう？ 東京に居るのは厭だ、温泉か海水浴か、それは經濟が許さぬ。では國へ歸らう。それより仕方がない……」。

「が考へれば故郷は厭だ、毎年の經驗が止せせと言ふ、そればかりでない、今年は妹は肺病で死にかゝつて居る、去年歸つた時にも傳染せぬかと心配した、今年は尙更だ、もう一年で學校が濟む、卒業間際に傳染しては困る……」。

「否、それだから尙更歸らねばならぬ、妹が死にかゝつて居る、それを知つて歸らぬのはあまり不人情過ぎる、母に對して義理がすまぬ、母は義理の母だ。妹は其連子で義理の妹だ、たとひ死んでも勉強中の自分には歸れと言つて來ぬに定つて居る。だがそれを却てよいことにして顧みないとは良心が許さぬ、今まで妹のことなどは少しも氣にかけて居なかつた、が如何にも心配して居るらしく、手紙を出す毎に眞先に妹の容子を尋ねた、自己を欺き兩親を欺き妹を欺いて居た、それが人の道か……」。

「國へ歸れ、故郷へ！ 兩親が待つて居る、瀕死の妹が待つて居る、死に目に遇つてやれ、空氣が清い、青い海が手を攢げて居る、新鮮な魚がある、靜かに英氣を養ひ潛勢力を貯へて來い、身體が大切だ！」

「然り身體が大切だ、だから歸郷したくないのだ、妹が肺病だ、傳染したら何うする？！ 己は今年は二十五の厄年だ、ひよつとすると傳染す

るかも知れぬ、恐しい！

「父に遇ひたい、が恐るべき病人と一つ家に居るのは、——あゝ思うても慄然とする、苦痛だ、氣が晴れぬ、——京都へ行け、姉が居る、死んだ伯父の跡を弔ひたい、色々の人と色々の話をしたい。楽しさうだ、だがそれまでだ、思うた程愉快でないかも知れぬ……」。

「故郷、京都、何處へ行かうか、何らでも宜い、何處へ行つても同じことだ、價値の等差がない、何れを選んでよい、だから選擇に困る、本來ならば故郷へ歸るべきだ、だがもしも……それに京都にも未練がある、では兩方へ行けばよい、併し最早時日が足らぬ、彼方へ行き、此方へ行きしる間に休暇がなくなる、勉強もしなければならぬ。」

こんなことを彼は昨今二日の間果てしもなく考へて、遂には何が何だか分らなくなつた。最初は氣分だけで京都行に決定したことが後には歸郷と實際的の利害得失を比較商量する様になつた。京都と故郷とに於ける自分の生活狀態を詳かに胸に描いて見て、其利害を比較して見たが、何れも輕重がない様に思はれ、何れを選んでも宜いか困つた。

彼は考へあぐんだ結果何れとも定めかねたので、兎に角何處へ行つてもよい様な荷を拵へ、翌朝停車場へ行つて切符を買ふ利那に決定しようと思つた。

翌朝彼は新橋へ行つた。車の上でも絶えず京

都と故郷とを繰返した。けれども只だ如何にも忙しく兩方の地名が循環するのであつた。

が彼は遂に故郷への切符を買つて了つた。

二

汽車に乗つてから、彼は最早取り返しのかねことをしたと思つた。此一枚の切符が彼の全運命を支配するものの如く思つた。切符を買ふ時に始と何等の思慮なしに〇〇と言つて了つたが、あの時もし京都と言つたら矢張り京都へ行くんだつた。何うして此切符を買つたのであらう、愈々歸郷するに極まつたものの、彼は尙は京都へ行けばよかつたかしらと思つて、更に一兩日來の考を繰返した。そして自分の行爲を是認し、責任を免れる氣か、今度の行爲は自分が熟考の結果定めたのでない、其場に臨んで止むを得ずしたので、他から餘儀なくせられたのだと思つて自ら慰めた。併し尙ほ京都は斷念められなかつたので、汽車が北陸線との乗換場の米原まで行く間に長い時間があるから、兎に角それまでに今一度考へ直して愈々分岐點に行つて何うにか決しようと思つた。

滑稽だ、みじめだ、と殆ど人事の様に自ら嘲り自ら冷笑しては見るものの、この自己嘲笑も事實に對して何等の意義乃至價値があるか。つまらぬことを如何にも生死の大問題の如くに種種に思ひ煩つて全心を勞することは如何にも馬鹿氣きつたことだ、と自ら自己を批評しては見るものの、それかと言つて何うすることも出來

ぬ。つまらぬ些事だとは自分自身も十分知つて居るが、尙ほ且つつまらぬことが、恰も生死の大問題と同様な權威を以て彼に迫るのであつた。

時々窓から首を出して掩ひかぶさる様に曇つた空を眺めたり、カーブした線路を走る時何度も列車の車輛を數へて、其數の多くて長いのに子供の様に感嘆したり、又車中の人々の話に耳を傾けたりして、なるべく心を轉じようとする。

米原に着いた頃は眞夜中であつた。彼は愈々此處が……と一寸思つたが、此時には餘程心が平靜になつて居て、今迄何事も考へず最初から歸郷することに確定して居たかの如く平然として居た。乗換の人は下車し新しい客が入つて來た。やがて再び發車した。

米原を發車した後は、今迄の様に苛々した氣持はなくなつた。そして今迄と反對に、歸郷するといふことが楽しいことに思はれ始めた。恐しい杞憂などはなくなつて、すべて愉快なこと、楽しいことの連續が思ひ浮べられた。歸らぬと思つて居る所へ不意に歸つて行つたら、無かし皆が吃驚するであらう。否な喜ぶであらう。深い太い皺の入つた顴顔に、包みきれぬ喜悅の情を湛へた父の傍が眼前に現はれた。それと同時に京都のことも考へた。が今度は別段思ひ残す程のこともなかつた。秋か冬の休にでも行けばよいといふ氣になつた。たゞ、行くと言つて居た所へ行かず、歸らないと言つて居た所へ歸つ

て行くといふことが、何だか我ながら不思議な様でもあり、面白いことの様に思はれた。大事業でもなし遂げた様に、大なる困難に打勝つた様に思はれて、彼は獨り微笑むだ。

窓から外を見たら、外は眞暗であつた。其眞闇の中を汽車は轟々シュ／＼と疾驅して行く、細かい柔かい雨が顔にあたつた。

R市に着いたのは朝の八時、こゝで乗換へになるので下車した。發車まで三十分ほど間があつたので、停車場前の郵便局へ行つて「アスカヘル」と父に宛てて電報を打つた。彼は彼の村には電報などあまり配達されず、もし來た時には大抵凶報に極まつて居ることを思ひ出し、此電報が配達された時、如何に家人が驚くであらうと想像して、うつかり大變なことをしたと思つた。

十時過に日町に汽車を降りた。こゝから村まで十里程ある、半分は馬車であるが、それから先は歩かねばならぬ。今日中には行けるとは思つたが、あまり突然であつたから、態と明日歸ると電報を打ち、今日は何處でも都合のよい所に途中で宿る積りであつた。馬車屋へ行くとも馬車がないといふ。一番の客が多くて二番の馬車まで使つたさうで、此次のにはまだ三時間もあるといふことだつた。待つて居るのもつまらぬと思つて荷物を通運會社に托し、行ける所まで行く積りで素足に草鞋を穿いた。

雨上りの天氣で随分暑かつたが、地面は乾き加減で歩きよかつた。荷馬車や旅商人や、莫座

を背、大きな槍笠を被つた半島廻りの學生の群にも幾組か出遇つたり追ひ越したりした。一町毎に立ててある小さな里程標や電柱の番號の數の益々減じて行くのを見て心強く思つて一人テクタクと歩いた。一晝夜以上汽車に揺られた上、昨夜は一睡もしなかつたので、迎も歩けぬだらうと思つて居たが意外にも道が捗つた。松並木を通して、眞晝の日光を沿びてチラ／＼輝いて居る海を見、磯に寄せる波の音を聞いた時は、さすがに爽快を覺えた。的もなく果てしない旅でもして居る様な氣持になつて、歌など口ずさみ乍ら歩いた。遠い／＼彼方に綺麗な眉毛の様に突き出て居る自分の村の岬を望んだ時には、愈々國へ歸つたのだなと嬉しい様な詰らない様な氣がした。馬車の終點まで來た時にまだ次の馬車が來なかつた。暫く茶店に休んで又歩いた。かうして夕日が渺茫たる日本海に沈む時分、村から一里手前のA町に着いた。そしてまだ十分家に歸り得る時間も精力もあつたが、態と其町の知合の宿屋へ入つた。

「あんた今年歸らんちふ話やつたが、歸つてゐらしたね。」

洗足の水を持つて來た知合の下女が言つた。

彼女は平三の村の者であつた。

「誰がそんなことを言うたい？」と平三は草鞋を脱ぎながら言つた。

「あんた家の人が魚賣にござつて言はつしやつた。」

今年自分が歸らぬといふことが、こんな所ま

で知れて居ると思つて、平三は一種かすかな怖
を覺えた。

三

「兄様、兄様、もう起きまつしねえ。」

翌くる朝下女がやつて来て、かう言つて平三
を起しながら、早や蚊帳の吊手を外しかけた。
「おい何するんだい、今から！ 己が起きるま
で寐かしといて呉れつて昨夜あんなに頼んで置
いたぢやないか。」

平三は無理に起されて腹立たしげに言つた。

そして下女が蚊帳を外して了ふにも拘らず、彼
は尙ほ起きようとせず、

「今日は日暮に家に歸るんだから、おかみさん
にさう言つて邪魔でも寐かしといて呉れ。」と
つけ足した。

「それでもあんな、家の人が遇ひに来とるぞね、
それで起したのやわいね。」

「えゝ、家の者が!? 誰が?」と平三は半ば身
を起した。

「阿母様が遇ひに来て御座るのや」と下女は手
を休めて言つた。

「阿母さんが? どうして解つたのだらう。」

「今朝私が市へ買物に行つたら、来てござつた
さかい、言つたわいね。」

「えゝむ。そんなら早く言へばいゝに。」

彼は氣乗のしない風に言つて起きた。と部屋
一ぱいにさし込んだ日光がクラ／＼するほど眩
しかった。それを避ける様に床の間の方へ行つ

て、違棚の上に載せて置いた時計を見ると、も
う十時過ぎであつた。

「今顔洗つて直ぐ行くから、一寸待つて居て貰
うて呉れ——お前餘計なことを喋舌らねばよか
つたのに——」

彼は齒を磨きながら洗面所に行つたが、心の
中では「困つたな」と思つた。こんな所に泊つ
て歸らなかつたといふことが母に對して何となく
氣まづい、拍子が悪いと思つた。顔を洗ひな
がら、どう挨拶したものかと考へた。

手早く衣服を着換へて母家の方へ来た。廊下
から茶の間の入口まで来た時、直ぐ平三の眼に
入つたのは、母のお光の赤い齒莖と、黒く染め
た齒であつた。お光は茶の間の前の通庭に此方
を向いて立つて笑つて居るのであつた。彼は母
の顔を見ると直ぐ莞爾と笑つて見せた。

「お、歸つたかいの、息災やのう。」とお光は
言つたが、平三はそれを聞かぬものの如く黙つ
て、如何にも鹿爪らしく母の立つて居る前の上
り段の板間に横向に坐つて丁寧に頭を下げ、

「歸りました、御機嫌能う。」と改まつた挨拶
をした。それがお光の態度と少しも調和しなかつ
た。

「昨日電報を打ちましたので、吃驚なさいまし
なでせう。」

「お、お前、吃驚してのう、さあ吃度京の誰か
が死んだのに違ひないちて見たら、お前！」

「さうでしたでせう。實はあれを打つてから氣
がついたんですけれど。」

「そつでも、讀んで見て皆喜んだわの、今年は
歸らんちふさかい、一年週はれんと思つて居つ
たのに。」

「誰方もお變りありませんか。」

「うむ、皆息災や——何時頃家へ歸るいの?」

「え、今からでも歸ります。昨夜は疲れたもんで大變寐坊しまして。」

「さうやらう。昨夜遅かつたかの?」

「えいもう大分遅うございました。尤も、昨夜
は無理をすれば歸れんこともありませんでした
が、汽車が込んで一眼も眠らなんだのと、一日
一晩揺られ通して来て、日からずつと歩いたも
ので、もう睡いのと疲れたのとで此家へ一寸休
む積りで入つたら、もう動くのが厭になりまし
て。」

「えいイ、歩いたのか? 馬車はなかつたのか
いの、お前まあ大層な。」

平三は昨日のことを簡単に話した。そして最
後に「B村から戻り／＼歩いて來ました。」と
つけ足した。

お光の話によると、午後父と弟とが舟で町
まで迎に來ることになつて居る相であつた。毎
年歸省する度に家内中が此町まで迎に來て呉れ
る。そして何のかんのと世話をやくのが平三に
は却つて迷惑でならなかつた。兩親が自分に對
する愛情から様々に盡して呉れるのを感謝する
よりも、むしろ却つて親の威嚴を下げるものと思
つた。それで今飯が済むと直ぐ歸るから、迎
に來るのを止めて呉れと頼んだ。日中で暑から

う夕方涼しくなるまでゆつくり休んで、そして舟で歸つた方がよからうとお光は言つたが、平三は是非にとそれを止めた。では歸つてさう話すと言つてお光は歸つて行つた。

毎月一と五の日はA町の市日で、近郷から種種の産物を賣りに來たり買ひに來たりするので非常に賑かである。平三の村からは毎日商人が生魚を賣りに來て居るが、市日になると買物旁々鹽魚を賣りに來る人が随分多い。此日も丁度其市日にあたるので町は随分の人出であつた。平三が宿屋を出たのは十二時近くであつた。多勢の村人に遇ふのを避けるために、市のたつて居る本通を行かずに態と裏路を行つた。併し町の出口の茶店に魚賣の女が四五人休んで居た。平三は氣はついて居たが言葉交すのが免倒に思はれ、態と知らぬ風を装うて眞直に前方を見つめ、如何にも急ぐと言つた風に歩いた。

「お、平七の兄様！」と一人が呼び止めた。

平三は始めて氣がついたと言はぬばかりに、「やあ、之は皆様。」と蠅頭傘を杖にして頭を下げた。女達は一人一人叮嚀に挨拶した。そして皆な、

「お桐さんも快うなれ得さつしやらないで、御心配でございませう。」と言つた。

それが平三には恰も彼が妹の病氣のため態々歸つて來たのだと此人達に思はれて居る様に聞えた。そして又其言葉附から妹は既に死んだのではないかとさへ思つた。

「大變悪い様ですかね？」と彼は心配相に聞い

た。

「えい、何しろ長い間の病やさかい、大變弱つてござるわいね。まあ看病のお陰で今まで……」と一人が言つた。

「本當にあんな介抱は、誰だつて爲ようと思つても出來んもんぢやが、感心な。」と今一人が半ば獨語の様に言つた。

町を出ると直ぐ眼の前に、岬になつて海に突出た村が見える。岬の中段に雞の冠の様に見えるのは寺の森で、それから少し手前に見える瓦屋根の家が自分の家だと思ひながら、小波の寄せる渚を跣足になつてビチャ／＼と歩いた。

枝葉の少い瘦せた曲つた松並木を右に見、左に際涯なき海を望んで、白い細かい柔かな砂の渚を一里ほど行くと小さな川がある。其川を渡ると急に巉巖になり、今迄の砂渚と殆ど直角をなして突出して居る。其巉壁の下を傳つて峽灣の様な入江を三つばかり越すと村に入るのである。平三は今眼前に自分の村や自分の家らしいものを見て、強ひて何事かを思はうと努めたが駄目であつた。遠い旅から歸つたといふ氣は少しも起らなかつた。只だ一つ心に上つたのは、今町の出口で村の女達との話から不圖氣がついたことだが、今朝母が來た時何よりも先づ妹の容體を問ふべきであつたことであつた。彼はあの時妹のことは一言も言はなかつた。それを母が何とか思ひはしなかつたらうかと種々に氣をまはした。今まで手紙で始終安否を尋ねたことが單にお世辭にすぎなかつたと母に思はれなかつたかしらと心配もした。そして又そんなにかりそめにも母を邪推する自分の卑しい僻んだ心を悲んだ。

つたかしらと心配もした。そして又そんなにかりそめにも母を邪推する自分の卑しい僻んだ心を悲んだ。

四

「さあ、暑かつたらう。涼んでくんさい、冷たい水が汲んであるが一杯飲まつしやい。」とお光は廣間の板間に薄縁を敷きながら、佛壇に拜して佛間から出て來た平三に言つた。

「只今。」と改めて挨拶して、「お桐の様子はどうです。今も途中で聞くと大變悪い様ですが。」と先づ聞いた。

「此頃は少し快い方でのう。つい今迄此處へ出て涼んで居つたれど、蠅がむしつたりするんで蚊帳の中へ這入つた。七八日前にはお前、早やもう死ん／＼になつてのう、親類のものが寄つて二晩も夜伽までしたれど、又少し快くなつたわいの、これでそんなことが三度や。」

「随分御心配でしたせう。」

「昨日お前が歸るちふ電報が來たら、お前、大變喜んでのう、『お、嬉しやなア、兄様に會はずに死ぬかと思つたら、そつても遇はれるかなあ、』つて嬉しがつたわの。」

「さうでしたか。」

平三はさすがに妹が悪かつたため豫定を變更して歸つたのだと詐りを言ふ事は出来なかつた。「兄様お歸り……」と此時納戸の蚊帳の中から苦し相な妹の聲が起つた。

先鞭をつけられたなと平三は思ひながら、

「お、歸つたわいの、大變悪かつたさうやのう、今そこへ行かうと思つて居たのだ。」と納戸の入口まで行つて、恐る／＼蚊帳の外から「何うだい、様子は。苦しいか？」と言つた。

「有り難う……此間は死ぬと思つたれど……それでもまだ壽命があつたやら、まだかうして居ます……兄様にもいつも心配をかけて……」と年老でも言ふ様な口調で言つて軽い咳をした。「なに、そんなことは……俺も今年は歸らぬつもりだつたけれど、何だか歸りたくなつてな……」

「昨日、電報が來た時、嬉しかつたわね。もう兄様に會はんと死ぬかと思つてをつたが……」暫く話が途切れた。

隣の人が來て挨拶して居る所へ、父の平七が濱から歸つて來た。丈の高い骨組の大きな、今年漸く五十の坂を越したばかりなのに、もう頭は半白になり、赫い顔には深い皺が幾條も刻まれて、年よりは五つも六つも老けて見えた。所綴布の入つた腰迄の紺の厚衣を、腹まで見える程ゆるく素肌に着て、細い木綿絞の帶を横に結んで、其結目の所に鼠色に垢のついた汗拭を垂げて居た。俗に足中といふ手製の小さな藁草履を穿いてスト／＼と長い足で歩いて來る父の顔を見た時は平三は胸一ぱいになつて、懐しさと感謝の念とがごつちやになつて、思はず涙がこぼれた位であつた。平七は包み切れぬ喜びと満足の色を無作法に開いた口元に笑を湛へながら、

「おう、平三歸つて來たかい。」と暫くボンヤリと縁先に立つて平三の顔を見つめて居た。そして平三は居住ひを直して挨拶をしかけるとそれを抑へて、

「挨拶なんかせんでも宜い／＼、健康な顔さへ見りや、それで澤山や、」と言つて「あはムムム」と又嬉しさうに笑つて縁に腰掛けて汗を拭いた。

又暫く沈黙が続いたが、父は思ひ出した様に、「お桐や、どうやいの、大儀かの？」と聞いた。が返事がなかつた。

「瓢網はどうやいね。」とお光が問うた。

「うむ、鰹の氣がするので皆な外の者共ア看視つて居る。俺等も行かんならんのやれど、誰も人が居らいで、今誰かに頼まうと思つて來たのやが。」

「磯二は何うしたいかえ？」

「あれは今仲間網の仕事をして居るので行かれんのや……誰か居らんかなア……」と平七は暫く考へる様にして居たが、ふと氣がついたやうに「平三、お前歸るなり氣の毒やが行つて呉れまいか。」と言つた。

「え、行きませう。」と平三は答へた。「又鰹が來たかね、去年も丁度今頃でしたか。」

「此人あ、何んぢやいね、今歸つたばかりで疲れとるもんを。」とお光は差止める様に言つた。「いえ、何ともありません、何か着物を出して下さい。」

平三は氣輕にかう言ひながらすぐ立ちあがつ

てその支度にかかつた、父のと同じ様な短い紺の厚衣を着て、父の注意で編笠まで被つた。

「そんなら頼む。」と平七は言つて先に立つた。道に幾人も村の人々に會つた。平三は一人一人に簡単な挨拶を交はした。

「おや／＼こりやどうぢや、歸るなり早速仕事やね！」と誰も言つた。

一足先に歩いて居た平七は、「家へ歸つて來りや、矢張漁師をせんならんぢや、あつはつはムム」と嬉しさうに笑ひながら答へた。平三は只だ微笑するのみであつた。

五

海岸から五六町も沖に、村の端から端にかけて、一町隔き位に網が下ろしてある。瓢網の形をして居るので瓢網と呼んで居る。又俗に「テソコ」とも言はれて居る。沖から入り込んで來る魚は大小種類を問はず如何なるものでも捕れる。極小さい仕掛の網であるが、一旦入つた魚は再び出て行くことが出來ぬ様に出來て居るのが特長で、可成り取揚もあるし、高沖の漁と違つて資本も人手も多く要らず、この網一具持つて居れば樂に生活出來るので大變調法がられて居るものだ。一日に三四回見に行けば宜いのであるが、鰹は非常に精悍な魚で、網の中に入ると盲滅法に暴れ廻つて、遂には偶然にでも出口を見出す恐があるので、鰹の來た時に限つて見張りするのであつた。

平三は鰹を解いて舟に乗るや否や鰹を取つた。

父は舳の錨網を放して棹を持った。舳の尖で一突きつくと、舟がすつと軽く岸を離れた。平三は體に早緒をかけた。先刻から濱の岩に大きな檜笠を被つて、筒へ煙管のまゝ腰掛けて、都合によつては自分も網を下ろさうと他の舟の様子を眺めて居た甚六の爺さんは、「やあ、東京の旦那、手が泣きますぞ。筆よか舳が重からうが。」とから／＼と笑つて、「またお前さんが來たら錨が獲れるわ。」とぶつきらば／＼に言つた。

平三は一年振に舳を振つた時勇ましい氣がした。思ひ切り力を入れた。全身を海に投げる様に前に屈がめ、又出来る丈胸を張つて後に反つた。舳の下から無數の渦巻から成る舟跡が、まるで廣い帯でも織り出す様に繰り出され、眞中に舳が角度の鈍い「／＼」の字を描いた。彼は眼に見える様に快速に舟の進むのを愉快に感じた。

手鍵を持つて舳の船梁に腰掛けて居た平七は、「そんなに力入れんでもいゝよ、豆が出来るぞ。」と注意した。途端に二人は顔見せて微笑した。

網に着いて直ぐ取り上げて見ると錨が五六本入つて居た。それから舟を網の臺の方へ廻し、二人共舳に立つて、網の入口や中央を凝と眺め入つた。暫く注視して居たが入つて来る様子がないので、平三は眼を前方に轉じた。一町餘下手に同じ網があつてそこにも見張して居た。そのまた下手にも斜にだん／＼岸に近づいて幾艘かの舟が並んで居た。どの舟にも二人宛立つ

て見張つて居た。ずつと遠くの舟に立つて居る者は案山子の様に見える。

「お前坐つて休んだら宜い。」

平七はかう言つて自分は尙ほ眼を網の中から放さなかつた。平三は言はれるまゝに腰を下ろして煙草に火をつけた。

「今年は今日が始めですか。」と平三は聞いた。

「さうでもないけれど、家の漁場は沖やさかい今まであんまり獲れなんだ。長平などは下手やもんで、今までに大分獲つたれど。」

「また少し來て呉れると宜いがねえ。」

「少し東南風模様やさかい、今日明日は少し来るやらう」と平七は海の中を見つめながら話した。とその途端に、

「入つたぞー」と突然平七が叫んだ。

「どれ？」と平三は起ち上つた。

「今あつちへ行つた。——それ來た。光つてるやらう。」

黒ずんだ水の中にピカッと銀色の閃光が平三の眼を奪つた。と思ふと忽ち見えなくなつた。

と又忽ちピカッと光つた。彼等は狭い網の中を縦横無盡に突進しまはつて、時々暗夜の電光のやうに其白い横腹を閃めかした。

「さあ、取るまいか」と平七は網を外した。平三は舟を網の入口の方へ廻した。

平三の眼には五六本としか見えなかつたが、網を取りつめて行くと二三本ばかり次第に狭く淺くなつて行く網の中を、前後左右に氣狂の様になつて突きまはつて居た。

十分間隔き位に二三度こんなことが續いて、それから暫く途切れた。

「息をしだしたな、これで暫く來んわい。」と平七は獨語つて、平三に背を向けて立つたまゝ、矢張り獲と網の中を見つめて居た。

「お桐には困つたわいの、もう早や根も精も盡きて了つた。」

やがて平七は言ひ始めた。

「あんまり長病でねえ。」と平三は言つた。

「長いつて／＼！もう滿三年やが、ちつとでも宜い目が見えるのなら勢もあれど。おれはもういやになつた！」

「本當ですね。」

「死ぬことは分つて居るのやさかい、一日でも早う亡くなつて呉れりや宜いと、俺も阿母もさう言つて居れど。」

「……………」

「家には何も心配のことはないのや。彼の子さへどうかすると淡然とするのやれど、ほんとに困つた。一寸も手を放されんさかい。」

「中々長い病氣ですからねえ、もと私の學校の先生で十年も肺病に罹つて、もうすつかり肺がなくなつて了つて居たといふのに、矢張り生きて居ましたよ、それには醫者も驚いてたといふ程ですからねえ。困つた病氣ですよ。」

「ほんとに餓鬼病だな、今までに二三度も死にかゝつたれど、矢張り壽命があると見えて、あとして居るが、今までは親の慾目で癒るまいもんでもないと思ふとつたれど、今ではとても駄

目やさかいな。」

「どうしても駄目ですかね。」と平三は外に言ひやうもなかつた。

「駄目だとも！ 醫者も藥を飲ますのは、氣休めのためやと言はつしやるし。」

「本人はどう思つて居るでせう？」

「あれも覺悟してるよ。一日も早う死にたいと言うては泣いて居るわいの、さうすると又可哀相になつて来るしの、磯二なんか傳染と言うて、決して一所に飯など食はん、お桐が納戸から出て來るとお膳を持つて廣間へ出て行くもんやさかい、あれも何かにつけて氣兼ねるし、それを思ふと可哀相でならぬわいの。あんな病氣を貰うて來たのは、あれの不幸やさかい、どうも致方がない、それでもまあ俺達は出來るだけ手を盡して介抱してやつてるわいの。今まで十分醫者にもかけるし、どんなものでもあれの欲しいといふものは食はさんものはないのやさかいな。どんなことがあつたつて間食は絶やしたことはなし、魚なんか刺身でなけりや食はんしの。こんな網でもあるお蔭で、海さへ風げば何かかんがあるさかい宜い様なものの、中々大抵なことをやないわいの。それやさかい、どうしてあんな介抱が出來るかと人に言はれる位大事にして居る。これだけにしてやつて癒れ得んもの、何ともして見うがない。」

「困りましたねえ。」

「お前が歸つて來て善し惡しやつたわいの。」と平七は相變らず海の中を見入りながら言つた。

平三は意外に思つた。

「私も歸らぬ積りでしたけれど。」

「今年歸らんちふことで俺も内々安心して居たが、昨日電報が來た時、嬉しいはと思つたれど、また、傳染りでもせんかと思つて心配でもあつたよ。勉強中で今が大事な時やさかいなア。」

「……………」平三は深い溜息を洩らした。

「何時も言ふ事やれど身體だけは大事にして貰はんと、……お前一人が頼りやさかいな。」

「はい。」

「お前一人を頼りにして皆かうして苦勞して居るのやさかいなア。」と父はしんみりと言つた。「どうでもして偉い者になつて呉れ、人に笑はれる様な事をして呉れるな。こゝまで漕ぎつけたのやさかい、もう先も知れとれど、若し今お前に何うかあつたが最後、俺達はもう如何することも出來んやぞ！ 四年の間無理な金を入れたことは惜しいことはないが、それ見たことかと人に後指さされるのが俺ア何より辛いのかとお前が東京へ修業に行つて居ると、そりや、賞めてくれる者もある代り、悪口言ふ者もあるから、そこをよく考へて貰はんと、なあ平三。よくまああんな小さい商賣して居て遣つて行けるなア、感心だ、とても人の眞似の出來んことやと賞めて、都合の悪い時には何時でも少し位の金なら貸してやると親切に言うて呉れる者もあるが、又無理算段してまでそんなに學問さして何になる、と妬んで言ふのか、蔭で悪口言ふ者もあるさかいな。どうかまあ俺に恥をかゝせぬ

様にして呉れや、これ見て呉れと言ふ様になつて呉れ、そればかりを樂しみに待つて居る。」平七は尙ほ網の中を見つめながら話しつづけ

た。

「平三や、俺は長生き出來ぬぞ、早く死ぬぞ！ お前が何うにかなるまで死にたうないと思つてる。金のことは心配するな、あれだけで逆もやつて行けぬことはいや程知つて居れど、今の所はどうにもならぬ。けれども臨時に要する時は幾らでも送るよ。なあに俺の生命のある間は三百や五百の金は如何にも出來るさかいなア、幾ら借金しても俺の眼の明るい間はお前に心配はかけぬわい。なあ平三、おれは借金までしてお前に送つて居ると人に思はれるのが業腹がわくさかい、決して金の出所を人に悟られぬ様にして居る。それやさかい、誰でも言はんものはない。『平七の奴はまあ何處にあんなに金があるいな？ どれだけ貯めて置いたやら』つて。村のものには誰にも一文も借りて居らんさかい、さう思ふのも無理はないさ。村の者には鏝一文も借りてないさかい、お前も誰にも遠慮することはない。肩身を廣くして居るこつちや。な、解つたかい、何も心配せんでも宜い、誰にも遠慮は要らぬのやぞ。」

平七はしんみりと語つた。平三はその愛と情とに充ち滿ちた父の言葉に對して何と言つてよいか解らなかつた。感謝の涙が頬を傳つた。彼の子供の時分から親子がしんみりと語るのは何時もかうした舟の上であることを思ひ出した。